



金沢市宝町にある宝円寺。前田利家によって建立された

八重さんと呼ばれる、80を超えた豪快で気っ風の良なおばあちゃん

金沢市宝町に宝円寺という曹洞宗の寺院がある。

生まれも育ちも東京の僕は、幼い頃から毎年夏になると両親に引き連れられ、代々の縁あるこの寺へ法事に寄せてもらっていた。

にもかかわらず実のところ僕は、50の齢を過ぎるまで、金沢という自身の先祖が踏みしめてきた土地

## 武門の心得

前田利家6男利貞の子孫  
建築家

前田 紀貞

に、己の中での居場所をうまく与えてやるのができないままにいた。

そんな折、今年の夏の妙な縁が、長い間変わることもなかったそのよそよそしさに、ひとつの静かな亀裂を走らせたのだった。それはあまりに突然に、僕の中に眠っていた金沢への愛おしさを一気に吹き出させる事件となった。

### 苦痛以外の何物でもなかった

宝円寺は、1583（天正11）年、前田利家公により建立された後、前田藩累代の菩提寺とされながら、天徳院とともに加賀藩曹洞宗の触頭となつて藩宗教行政の一翼を担ってきた歴史を持つ。場所は大立野台地の崖上に位置し、

その頂へは下の街から幾つもの曲がりくねった坂が通じている。また、境内の奥には鬱蒼とした林を抱え、現在は絵師・俵屋宗達などの墓所が残される異界の様相を呈している。

ただ幼い頃の自分にとって、それら寺周りの妖艶な佇まいや暗く線香臭い畳の空間、そして、よそよそしい大人たちが集う会合の空気は、訪問の度に苦痛以外の何物でもなかった。その窮屈さは、居合わせた人たちの自分勝手な笑い声や砂糖を固めた菓子、威圧感ある分厚い黒縁眼鏡と立ちこめる煙草の煙が相俟って、つい最近まで僕の中でその当時のまま化石のようになっていた。

このお寺には、数年前まで、お

が住んでいた。彼女はなにかあれば、ガツハツハと大きな口を開け金歯剥き出しで笑うのがお馴染みだった。

お八重さんは10代の娘の頃からお寺に住み込み、そこでの事務作業一切の取り成しを任されていた。「八重ちゃん軍団」と呼ばれる高齢の女性たちもまた、彼女の取り巻きとして、お寺の掃除洗濯炊事そして法要等の仕切りを担っており、これまた宝円寺運営の素手の担い手であった。

「住職」というのは、ある意味、お寺に「住むのが職業」であり、代々受け継がれてきた宗教財産を、次へ向けて補修し継承してゆくのが生業である。その意味でお八重さんは、実の住職以上にこの寺の住職を全うしていたといえる。

利家公の奥方である芳春院（お松の方）をはじめとして、金沢では「女は強く」が血なのだと思にしていただけに、幼い僕の中のお八重さんは、400年前のお松さんと確実に重なっていた。

### 「男たるもの」繰り返す父

1970（昭和45）年夏、その年も僕たち家族は、法事のため、幾つもの列車をコトコト乗り継いで夏の金沢へ向かっていた。今と違い殺風景な駅舎に到着すると、小学4年生の僕は気が重くなるのだった。なぜなら、これから小一時間、愛想の無い硬い床で行儀良く正座しながら、訳のわからぬ経とむせるような線香の匂いに辛抱しなければならなかったからだ。

おまけに、金沢生まれ金沢育ちの親父の厳格は格別だった。やたらデカくしゃがれた声で「男たるもの」を繰り返すその男は、格式の場ではより一層スキが無くなるのだ。であるからして、厳粛な義理事のあいだ中、正座のまま微動だにせず、といった子供の憂鬱など口に出せよう筈もなかった。

### ピリピリが大きくなっていく

その日お寺に到着すると、いつも最初に通される1階奥の座敷で、上座に座る親父を中心に皆で遅い昼飯を食った。当然、粗相無きよう子供ながらに精いっぱい緊張を感じながら。上座の親父は、終始無言でただ黙々と出されたものを食っていた。

一瞬何が起こったかわからなかったが、総勢100を超える大人たちの冷静な眼球が縦横あべこべになったまま、僕の泣きそうな顔に突き刺さっていた。ただその時、恥ずかしいよりも真つ先に頭に浮かんだのは、他ならぬ親父の鬼の形相だった。怒られる…、そう思った。

ひとしきり式典が終わわり、親父がこちらに近づいて来る気配を感じた。子供ながらにしれっとその場を立ち去ろうとするその臆病な背中に向かって、そんなことお構いなしにドスの効いたしゃがれ声が追いかけてきた。

「おい紀、男たるもの、痛みを我慢できず逃げ出すくらいなら、たとえ無様に倒れようと終いまで辛

ようやく飯も終わり、間もなくしてお八重さんに本堂へ通される頃には、既に先程からの正座のせいで、僕の小さな足にはピリピリした電気が走っていた。本堂のひんやりした床に座すよう奨められるがままに従ったが、すぐにも僕の足のピリピリは、それを意識すればするほど、石抱の拷問で膝から下を押し潰されていくように徐々に大きくなってきた。そして、式が開始し十分もしないうちに、下半身から感覚は全く消え失せてしまっていた。

式も終わりに近づき焼香の時間がやってきた。僕は、1人また1人と立ち上がり、偉い人から順繰りに披露する大人たちの退屈なパフォーマンスを横目にしていた。と同時に、下半身の感覚が無くな

っている自分にこれから起こるであろう事の顛末について、幼いながらにもおおよその見当はついてきた。ただ、厳格な親父の手前、その足を楽に開放してやる訳にもいかず、追い詰められた猫のように、じっと自分の番がやって来るのを待っていた。

### 焼香の順番が来たが…

残酷にも、いよいよ末席に番が回ってきた。僕は意を決して立ち上がったまではよかったが、自分が地面に立っているという感覚が微塵もなかった。おかしいな…、そう思う間もなく目の前の世界は突然時計回りに回転し始め、気が付けば畳に染みついた線香の匂いが僕の鼻先にべっとり触れていた。

抱したおまえは格好いいんだぞ」そんなことを言われたように思う。そしてその傍では、お寺で一番偉いあのおばあちゃんが金歯を見せながらガツハツと豪快に笑っていた。

男の厳格とか女の強さというものの実は、末席にしか座ることのできぬほどの者を、そうして深く包み込んでくれる温かな情であったことが、その時ほんの僅かながらだが小さな体に染みこんでいた。

### 寺小屋ワークショップ開く

あれから丸43年の月日が流れた今年同じ夏、僕が主宰する建築設計事務所は、この宝円寺で「寺小屋ワークショップ」なるものを開催した。総数20人以上の建築設計

のトレーニング志願者が、お寺に寝泊まりしながら1週間の建築修行をこなすプログラムだった。そこでは、建築の専門技術のみならず、それを創る根となるところの炊事洗濯掃除、そして日々の所作一切への論しも含めた全人的建築修行が要であった。

これは僕の信念であり筋道のだが、今の建築に携わる人たちが「職業人」になってしまうことにとっても危惧を感じる。建築という誰にとっても人生での一大事に立ち合う事業が、「一職業の範囲」で収まってしまえるとはどうしても思えないからだ。だからこそ僕は「建築道」という言葉を発明し、専門技術の前に在るべき魂や志なものへの想いを、若い衆へ強く論そうとする。

それが、「建築とは職業でなく生き様である」という、侍の志に由来していることは言うまでもない。恥ずかしげもなく全身でそう信じている。

その建築道ワークショップの2日目、昔と何一つ変わらぬ宝円寺1階奥の座敷で、学生諸君と質素だが規律ある朝飯を取りつつ、ふと気付くことがあった。

そう、かつてあの厳格な親父がどっしり座っていた、そこだけ異次元の上座に、今、自分が長として座っているではないか。あの時の親父は自分から遙か遠くに居り、そこに近寄ることのできる感触すらなかった正にその座に、だ。僕は、足のピリピリを我慢しながら気の向かない昼食を取っていた43

年前の昼に完全にタイムスリップしていた。

### 気が付けば親父そのもの

自分は未だ人生と建築の修行中の身であり、足らぬことばかりではあるが、あの日、親父が座っていた座が自分に回ってきている順繰りだけは現実であることを感じていた。おまけに、「男の道とは何か」「建築の道とは何か」などと、いささか高圧的に若衆相手に問うているその姿は、気が付けば親父そのものであった。

「最近の若者は…」という言い種は、今の時代、口にすることすら憚られる暴言のように思われている。だが驚くことにそれは、古

こと。ここで武道は禅道に通ずるのだ。

### 人生後半の「覚悟」

この夏、こうして僕は、あらためてこれからのこの国、いや金沢という質実剛健な地での「武門の心得」を、拙いながらも後進に論して行く責を噛みしめた。

そう思い込めた途端、昨日まで目にしてきた金沢の寺の硬質な佇まいは少しずつ溶解し始め、新たな決意を背負った己の溶液と入り混じってくるよう感じられた。今、目の前の金沢という世界を見ているこの目玉こそ正に、実は己ですら気付くことのなかった、かつてこの地から流れ出した血に縁起しているに違いない。

そう思えばこそ、人生後半、この北陸の地にて成すべきことあらば、すべてを擲って事に当たろうと覚悟するのであった。今まで



建築ワークショップ2日目の朝餉の風景=8月5日、金沢市宝町の宝円寺

代エジプトの時代から綿々と語り継がれてきた常套句にほかならない。いやだからこそこの苦言のお陰で、時代はさほど間違わず継承されてきたともいえるだろう。

ただ、今の柔い日本でそれを口にしようものなら、分からず屋の老人のように扱われかねないと誰もが恐れるのだ。それだけ今、大人が物分かりよくなりたがっているし、後進たちに嫌われたくないと己の保身を優先しようとする。

だが、そんな風向きなど意に介すことすらなく、金沢生まれの旧き男から順繰りに回ってきた座布団は、未来に芽吹く若き芽のために、己が臭い肥やしになり切る「武門の心得」の覚悟を教えてくれる何よりの形見だった。それは滅私であり無私であり無我である

50年以上の間休憩していた分、必ず取り戻してやる、そういった気性だ。

朝餉の上座で、そんな長きに渡る時の液体の中を漂いながらも箸を口に運んでいると、その傍で事務所スタッフとして同行していた女房の、ハッハッハという笑声が聞こえてきた。  
順繰りだ…。



前田紀貞

(まえだ・のりさだ)

1960(昭和35)年

東京生まれ。85年京

大工学部建築学科卒、

85〜90年大成建設設

計本部、90年前田紀貞ア

事務所主任、2008年前

田紀貞建築塾開校、

日本大学、法政大学、

東京理科大学、国土

院非常勤講師、京都

精華大学客員教授を

歴任。いしかわ観光大

使、石川県人会理事。